

## 芸能六斎の創出と展開 ―― 上鳥羽の芸能六斎を中心に ――

柿本 雅美

### はじめに

六斎念仏とは、太鼓や鉦を打ち鳴らしながら唱える念仏のことである。現在、京都の六斎念仏は、芸能的要素の強い芸能六斎と、念仏を堅持する念仏六斎のふたつに分けることができる。芸能六斎は見る者を楽しませる娯楽性の高い芸能であり、念仏六斎と併せて京都の夏を彩る民俗芸能として知られている。八月ともなれば盂蘭盆の精霊迎え、精霊送りや地藏盆において京都市内各所で六斎念仏が行なわれる。

盂蘭盆をはじめ、他者供養の念仏として行なわれている六斎念仏は、本来、六斎日（毎月八、一四、一五、二三、二九、三〇日）に斎戒謹慎して念仏を唱えることであつた。室町時代後期には、京都を中心として大阪や滋賀、奈良など周辺地域へ伝播し、六斎念仏の講集団が結成される。この頃の六斎念仏は、太鼓と鉦を用いて歌うように念仏を唱えるものであつた。それが一七世紀初頭になると、六斎念仏講中は六斎日ではなく、盂蘭盆など

に死者の供養に回りはじめるようになる。そして、一八世紀後半になると芸能を主体とする六斎念仏が登場する。当時の流行芸能であった能や歌舞伎、浄瑠璃、また獅子舞や曲芸、祇園囃子、長唄などを六斎念仏化し、取り入れることで芸能的・娯楽的な六斎念仏、すなわち芸能六斎が行なわれるようになった。このように六斎念仏が芸能化したのは京都だけである。<sup>(1)</sup>

現在、京都の六斎念仏は一四か所に伝承されており、その多くは芸能六斎である。<sup>(2)</sup>昭和五二(一九七七)年に京都六斎念仏保存団体連合会が結成され、同五八(一九八三)年には国の重要無形民俗文化財に指定された。本稿では、伝統的な芸能六斎の演目を紹介しつつ、近年新たに創出された芸能六斎について考察していく。そして、今後の芸能六斎の展望についても論じていきたい。

## 一、近世における芸能六斎

### (一) 六斎念仏の芸能化と芸態

芸能六斎は先述のとおり、一八世紀後半に成立したと考えられている。『拾遺都名所図会』(一七八七年成立)には六斎念仏の説明として、

六斎念仏ハ毎歳七月十五日に在郷よりおのゝ組を立て都の町々に出、盂蘭盆会魂祭の馳走に家々の所望により行ひける、近年ハおどけ狂言をまじへて衆人の目を悦バしむるも三仏乗の因となる便りならんか



図1 『拾遺都名所図会』巻一(1787年成立)に描かれた芸能六斎

と記され、念仏に加えておどけ狂言を行ない、人々を楽しませていたことが記されている(図1)。また挿し絵には、太鼓や鉦を叩く人々に加えて獅子舞、ササラを持った道化、笛を吹く人物が描かれていることから、このころには現在の芸能六斎に近い形が取られていたことをうかがい知ることができる。

また、寛政一二(一八〇〇)年六月二九日付の御触書(古久保家文書<sup>(3)</sup>)に、

盆中近在より罷出候六斎念仏之内ニハ、近来念仏之本旨を取失ひ、種々遊芸を差加候儀等、追々増長いたし候向も有之趣相聞候、右ニ付若輩成百姓共は、猶更農業を怠、専右所作之稽古等ニ無益之失脚も有之、身分不相応之風儀ニ押移候様可相成、村役之者共、示方不行届、心得違之事ニ候、已来前々仕来之趣を以、余事を不交、念仏執行いたし候義は格別、遊芸を加候儀ハ堅致間敷候、此旨、右念仏差出来候村々へ、不洩様可申通候事、

右之通去ル卯年七月申触させ置候間、心得違之ものハ有之間敷候得共、又村役人より、猶々無油断相示候様、存々へ不洩様可申通事

申六月廿九日

近年は念仏の本旨を失って、数々の遊芸を加え、若い百姓は農業を怠ってその稽古をしている。従来通りのやり方で六斎念仏を実施するのは構わないが、それ以外の遊芸を取り入れて行なうことは固く禁止すると記されている。寛政七(一七九五)年に出された御触書が、五年後の寛政一二年に再び出されていることから、京都町奉行が六斎念仏の遊芸化を取り締まるほど、六斎念仏の芸能化が進んでいたことがわかる。そして、文化四(一八〇七)年には六斎念仏は興行にかかるレベルに達し、「六斎囃子」と称す新しい芸能となつていたことが『撰陽奇観』に記されている〔植木二〇〇九、二八〇〕。

以上のように一九世紀初頭に確立した芸能六斎は、現在では大きく五つの芸態に分類されている〔芸能史研究会編一九八二、一八五～一八六〕。これを参考に芸能六斎の芸態について紹介したい。

①他の芸能を基本的にはそのまま移入したもの。後述する太神楽の獅子舞が取り込まれた「獅子」と「土蜘蛛」はこれにあたる。

②太鼓打ちの芸に流行の芸能を適宜咀嚼して加えたもの。芸能六斎は能、狂言、歌舞伎、長唄、常磐津、地歌など、近世後期のさまざまな流行芸能が取り入れられてきた。これらの曲が六斎念仏の太鼓曲に編曲されて演奏される。また、太鼓打ちが扮装をして曲の雰囲気を与え、太鼓を打ちながらその途中で手踊りが加わるものもある。





写真1 岩見重太郎(吉祥院六斎保存会)

各種の芸能が取り入れられた芸能六斎の曲目には、ほとんどに口歌がある。口歌を歌うことでリズムを取って、太鼓を叩くことができ、また曲を覚えるときにも有効である。あくまでもリズムを取るためのものであるため、口歌は大きな声で歌うものではなく、太鼓を叩きながら口の中で小さく歌われる。例えば、長唄「越後獅子」に取材した嵯峨野六斎念仏の「越後獅子」の口歌は「なんーたーらー うちなえちちちりつつん 牡丹は持たねど 越後の獅子はつるんつ うんつーつんて つつちてつてつんー つてつて つんつてつるんて ちれちてつん しゃしゃしゃん」というような具合で、長唄の歌詞をそのまま用いている部分と、三味線、鼓、笛を表現する部分がある。「つるんつ うんつーつんて つつちてつてつんー つてつて つんつてつてつるんて ちれちてつん しゃしゃしゃん」というところは唄以外の楽器を表現している。芸能六斎では、太鼓、鉦、笛を用いて三味線などの楽器パートが表現される。

③太鼓の伴奏にのって狂言風の一曲を演じる、六斎念仏化した地狂言とも言えるもの。中堂寺六斎念仏の「橋弁慶」は五条橋で弁慶と牛若の出会いをしくんだ芸もので、壬生狂言<sup>(4)</sup>の「橋弁慶」をそのまま六斎念仏に取り入れた演目である。「祇園囃子」の流しの囃子にのって弁慶と牛若の衣装を身に着けた者が無言劇を行なう。このほか、吉祥院六斎念仏の「岩見重太郎」は、読み本や講談で知られる豪傑・岩見重太郎が狒々退治を行なう芸もので、太鼓、鉦、笛の囃子のほか、狒々と岩見重太郎の立ち回りや、セリフが入る(写真1)。

④祇園囃子をそのまま六斎念仏に移し、その中に入れ事を加えるもの。京都の人間にとって馴染みの深い祇園囃子が六斎念仏化されたと言え、「祇園囃子」の合間にはさまざまな入れ事が加わる。千本六斎念仏では、近世の流行踊りであった雀踊りが加わり、久世六斎念仏や嵯峨野六斎念仏では、仮装の道化が加わる(写真2)。「祇園囃子」の代表的な入れ事は「棒振」で、祇園祭綾傘鉾の棒振り囃子や壬生狂言の棒振を演じていた壬生六斎念仏の人びとがその芸能を六斎念仏に取り入れたと考えられている(山路二〇〇二、一二六―一二七)。

⑤四つ太鼓などの数個の太鼓を置いて太鼓の曲打ちを見せる曲。四つ太鼓は、四つの太鼓を並べ、テンテントコトコ……と打ち始める太鼓曲で、すべての六斎念仏保存会が有し、また基礎の曲となっている。保存会によって叩き方やリズムは多少異なるものの、一番初めに習う曲であり、個人の技量を見せることのできる曲となっている(写真3)。

## (二) 芸能六斎の演目の成立

本節では、この五つの芸能の中でも①、②を中心に論じていきたい。一八世紀後半に成立したとされる芸能六斎のそれぞれの演目や演出はいつごろ取り入れられ、現在の演目とつながっていくのかであろうか。嵯峨野六斎

芸能六斎の創出と展開(柿本 雅美)



写真2 祇園囃子に登場する坊主(嵯峨野六斎念仏保存会)



写真3 四つ太鼓(嵯峨野六斎念仏保存会)

念仏を中心に一〇団体ある芸能六齋が有するいくつかの演目を取り上げたい。

# 猿廻し

「猿廻し」は、久世六齋念仏の「お俊伝兵衛」や嵯峨野六齋念仏、中堂寺六齋念仏、西院六齋念仏の「猿廻し」、千本六齋念仏の「堀川猿廻し」と同じく、人形浄瑠璃・歌舞伎狂言の「近頃河原達引」ちかごろかわらのたてひきに取材した演目である。「近頃河原達引」は通称「堀川」と呼ばれ、天明二(一七八二)年春に江戸・外記座にて人形浄瑠璃が初演された。天明五(一七八五)年には大阪・堀江角力座で歌舞伎化されている〔下中一九八三、二六七〕。元禄期に京都で起こったお俊伝兵衛の心中事件を題材にした作品であり、とくに〈堀川猿廻しの段〉が有名で、六齋念仏の「猿廻し」はここに取材したものと考えられる。

## 願人坊主

「願人坊主」は嵯峨野六齋念仏、壬生六齋念仏、千本六齋念仏に伝承されている。願人坊主とは、近世、江戸の町に居住し、門付や大道芸を生業とした僧形の芸人のことをいう。祈願者に代わって神仏への代参や代垢離をしていたことから、願人坊主と呼ばれた。演じた芸能は非常に多く、かつぱれやあほだら経などの芸能の母体となっている。

六齋念仏の「願人坊主」は口歌の歌詞から類推すると、常磐津「願人坊主」を取り入れたものと考えられる。常磐津「願人坊主」は文化八(一八一二)年三月、市村座で三代目坂東三津五郎七変化「七枚続花の姿絵」しちまいつづきはなすがたえの中的一曲として初演され、願人坊主の芸を取り入れながら、願人坊主がさまざまな芸を見せる様子を語ったものである〔平野他監修一九八九、八三八〕。



## 娘道成寺

嵯峨野六齋念仏、千本六齋念仏、桂六齋念仏に伝承される「娘道成寺」、壬生六齋念仏、小山郷六齋念仏に伝承される「手毬唄」は本名題「京鹿子娘道成寺」という舞踊劇、もしくは長唄に取材している。宝暦三(一七五三)年三月、江戸中村座で初演された。原拠は能の「道成寺」で、舞踊化は寛文年間(一六六一～一六七二)にはすでに行なわれていたという。安珍清姫伝説の後日譚の形を取った「京鹿子娘道成寺」は道成寺物の集大成と言われている〔河竹編一九六四、五四五～五四六〕。嵯峨野六齋念仏や壬生六齋念仏では、「へ言わず語らぬ我が心」の手踊りから廓の情景を歌った鞠唄までを口歌に使用している。

## 時雨

嵯峨野六齋念仏の「時雨」は能、歌舞伎の「紅葉狩」から取材された演目である。能「紅葉狩」は一五世紀後半に作られたと考えられており、信州戸隠山にて紅葉狩りをしていた上臈一行に誘われ酒宴に参加した平維茂が、じつは鬼神であった上臈を八幡宮の神から授かった神剣で倒すというストーリーとなっている。歌舞伎の「紅葉狩」は義太夫、常磐津、長唄の掛合で、明治二〇(一八八七)年一〇月東京新富座で初演された舞踊劇である〔河竹編一九六四、五五七～五五八〕。「時雨」では、口歌の前半部分に「紅葉狩」のストーリーが取り入れられている。

## 八島

「八島」は地歌「八島」に取材した演目で、嵯峨野六齋念仏と久世六齋念仏に伝承されている。地歌「八島」の作曲は安永年間(一七七二～一七八一)年ごろと考えられ、能「八島」の後半を歌詞としたものとなっている〔浅香編一九八四、九九三〕。双方の保存会の「八島」の口歌には地歌「八島」の歌詞が一部含まれている。



写真4 越後さらし (梅津六斎保存会)

#### 四季

嵯峨野六斎念仏、壬生六斎念仏の「四季」は、口歌から義太夫節景事物「はなくらべしきのことぶき花競四季寿」のうち、〈海士〉に取材した演目と考えられる。文化六(一八〇九)年大坂御霊社内初演とされ、舞踊的な要素の強いこの演目は、〈万歳〉〈海士〉〈関寺小町〉〈鷺娘〉を春夏秋冬に配置したものとなっている〔平野他監修一九八九、九六八〕。

#### 越後獅子・越後さらし

「越後獅子」は嵯峨野六斎念仏、壬生六斎念仏、中堂寺六斎念仏に伝承される演目である。文化八(一八一)年三月、江戸中村座にて初演された七変化舞踊おそざくらてにはのなまもじ「遅桜手爾葉七字」の一節、長唄「越後獅子」に取材している。越後獅子とは、近世に越後国蒲原郡月潟村を本拠として、踊りや軽業を披露ながら各地へ赴いた角兵衛獅子のことを差し、これを題材に作曲された〔河竹編一九六四、六〇〕。嵯峨野六斎念仏では、「越後獅子」の曲中に「越後さらし」という太鼓曲が入る。



写真5 獅子と土蜘蛛 (久世六斎念仏保存会)

長唄「越後獅子」の〈晒の合方〉に取材したものであろう。歌舞伎舞踊の〈晒の合方〉は細く長い晒を両手に持って踊られるもので、梅津六斎念仏の「越後さらし」では、この舞踊が取り入れられている(写真4)。

#### 鉄輪

「鉄輪」は嵯峨野六斎念仏、吉祥院六斎念仏、久世六斎念仏、壬生六斎念仏に伝承され、<sup>(5)</sup>地歌「鉄輪」に取材した演目となっている。地歌「鉄輪」は長享二(一四八七)年初出の謡曲「鉄輪」によった怨霊物で、天明四(一七八四)年に詞章初出の曲である〔平野他監修一九八九、八三一〕。

#### 獅子・神楽獅子、土蜘蛛

『拾遺都名所図会』に描かれている獅子舞は現在「獅子」や「神楽獅子」という名称で伝承されており、京都の六斎念仏のハイライトの演目であり、芸能六斎を行なうすべての保存会が有する演目である。二人立の獅子舞は、逆立ちや碁盤の上での曲芸など、見る人をはらはらせながらもアクロバティックな演技が魅

力となっている。これは太神楽の獅子舞が六斎念仏に取り入れられたものと考えられている。『拾遺都名所図会』にはササラを持った道化も描かれており、太神楽の芸態に近いことがわかるが、現在の六斎念仏ではどの保存会もササラは使用しない。「獅子」や「神楽獅子」は、「土蜘蛛」とセットになっており、獅子と土蜘蛛の戦いも京都の六斎念仏の花形である(写真5)。「土蜘蛛」は幕末に大念仏狂言から移入されたと言われており、壬生狂言を演じる壬生六斎念仏か千本ゑんま堂狂言も行なう千本六斎念仏が土蜘蛛を取り入れ、各六斎念仏講中に広まったと考えられている(山路二〇〇九、一八六―一八七)。演目の最後には巢と呼ばれる細長く切った紙筋を土蜘蛛が獅子や観客に向かって撒く。蜘蛛の巣の先端に取り付けられた鉛の芯を三つ財布に入れるとお金がたまるとか、御守になると言われており、観客は蜘蛛の巣を手に入れようと手を伸ばす。もともと能「土蜘蛛」がルーツであるが、蜘蛛の巣を撒く演出は明治時代初期に能金剛流で生み出された(浅香編一九八四、六七四)。それが歌舞伎や大念仏狂言、そして六斎念仏にも取り入れられていく。いつごろから鉛の芯を持つとお金が集まるとか御守になるという言説が生まれたかは定かではないが、蜘蛛の巣を撒く演出は当時の人びとの目を引いたに違いない。

芸能六斎の演目のうち「祇園囃子」「獅子」は京都においてすでに行なわれていた芸能から取り入れられており、最も早くに六斎念仏化したと考えられている。本節で取り上げた演目のうち「娘道成寺」の原曲である「京鹿子娘道成寺」の成立が宝暦三(一七五三)年、「八島」は安永年間(一七七二―一七八一)年ごろ、「猿廻し」の元となった「近頃河原達引」は天明二(一七八二)年、「四季」の原曲である「花競四季寿」は文化六(一八〇九)年、「願人坊主」「越後獅子」の原曲の成立が文化八(一八一)年となっている。一八世紀後半から芸能化し、一九



世紀初頭には「六齋囃子」と呼ばれ、興行も行なえるほどになっていた芸能六齋は、原曲の成立を鑑みても新しく登場し、そして流行した芸能をすばやく取り入れて、種々の曲を六齋念仏化していったことがわかる。「時雨」の原曲である歌舞伎「紅葉狩」は明治二〇(一八八七)年に成立していることから考えて、近代に入っても新たな演目を増やし続けていたことがわかる。それは「土蜘蛛」の蜘蛛の巣を撒く演出にも表れている。

### (三) 歌舞伎への逆移入

歌舞伎や地歌、長唄などさまざまな芸能が六齋念仏へと取り入れられていったわけであるが、六齋念仏は逆に上方歌舞伎の下座音楽へと取り入れられている。下座音楽とは、陰囃子とも称され、舞台下手の黒御簾やその他の舞台の陰において、幕開き、幕切れ、人物の出入り、台詞、しぐさの間などに奏され、情景、人物、台詞、仕草などを修飾する音楽のことを言う〔田中一九七九、一三七〕。下座音楽の「六齋念仏」<sup>(6)</sup>は、「伽羅<sup>めいばくせんだいはぎ</sup>先代萩」へ序幕花水橋土手の場〕の頼兼が駕籠から出たあと黒装束の諸士たちとの立ち廻りが代表的な用例である。唄、三味線に加えて、松虫と呼ばれる鉦が打ち込まれる、ゆったりとしたテンポの音頭のような趣も感じることのできる曲である〔平野他一九七九、四二八～四二九〕。この曲は幕末以来の型であるとされており、歌舞伎などを取り入れ芸能化した六齋念仏が上方歌舞伎へと逆移入されたものではないだろうか。

## 二、上鳥羽の芸能六斎

### (一) 上鳥羽六斎念仏の概要

一八世紀後半から一九世紀末にかけて、新たな演目を生み出していった芸能六斎であるが、大正から戦後にかけては一時中断する保存会もあり、新たな演目が生み出されるということはなかった。しかし近年、上鳥羽六斎念仏において、伝統的な芸能六斎を踏襲しつつも新しい演目が創出されている。

上鳥羽六斎念仏は、上鳥羽橋上鉦講中によって継承され、念仏六斎を保持する(写真6)。京都市南区上鳥羽に本拠を置き、集落は旧鳥羽街道に沿って南北に長く、上鳥羽小学校近くの小橋を境界として橋上地区と橋下地区に分かれている。かつては両地区に六斎念仏が伝承されていたが、戸数が少なく、後継などの問題から現在では橋下の六斎念仏は廃絶してしまった。また、大正年間までは芸能六斎も行なっていたと言いつ、その時に使用していた二丁鉦が現在も残されている。上鳥羽六斎念仏ではさまざまな理由から芸能六斎を行なうことが困難となったため、念仏六斎のみを行なうようになったと言う。つまり、芸能六斎と念仏六斎の双方を大正年間まで継承していた。

現在講中には一八軒が所属しており、毎月二三日に月次で行事が行なわれている。月ごとに講中の家々を順次回り、当番の家で講中伝来の地藏菩薩の描かれた掛軸を仏間にかけて念仏を唱和する。この掛軸は月ごとの当番の家で預かる。月次のほか、八月一三、一四日には棚経が行なわれ、依頼のあった家で「飛観音」か「節白舞」の中から二くり〜三くりが奉納される。かつては門口で行なっていたが、現在は仏間に上がって奉納している。



写真6 上鳥羽の念仏六斎（上鳥羽橋上鉦講中）

また、八月二二日には京都の六地藏巡りのひとつ、浄  
禅寺地藏尊前にて「焼香太鼓」を中心に奉納が行なわ  
れる。以前は伏見区六地藏の大善寺、西京区桂の地藏  
寺、右京区常盤の源光寺、北区鞍馬口の上善寺、山科  
の徳林庵とすべての六地藏を回って奉納していた。こ  
のほか、地藏盆での奉納も行なわれ、依頼のあった地  
区へ赴き、「焼香太鼓」を中心に奉納する。過去には  
八月二二、二三日の両日に地藏盆の奉納を行なってい  
たが、現在では八月二二日と二三日より前の土曜日の  
二日間となっている。上鳥羽地区では、地藏菩薩や大  
日如来の石仏が出土することが多く、それらを各家で  
祠に祀り、代々お守りする慣わしがあるという。その  
ため、八月二七、二八日には大日さんと称して各家の  
大日如来に対して念仏を唱えて回る。地藏盆とは少し  
異なり、「焼香太鼓」の一くりだけがいつもとは異  
なって奉納される。また、八月九―一六日の間には清  
水寺にて盂蘭盆奉納も行なわれる。

## (二) 芸能六斎の復活と演目の創出

大正年間に途絶えてしまった芸能六斎の復活は、平成二三(二〇一一)年に遡る。当時の上鳥羽橋上鉦講中会長は、かつて上鳥羽でも行なわれていた芸能六斎を復活させたいという思いを長年持つており、他の芸能六斎保存会へ習いに行くことも考えたという。しかし、芸能六斎と念仏六斎では道具も異なり、なかなか実現には至らなかった。また毎年、京都六斎念仏保存団体連合会が主催する「こども六斎教室成果発表会」<sup>(7)</sup>へ手伝いに赴いていたこともあって、子ども六斎を上鳥羽でも行なうことができないか思案していたそうだ。ある時、親しくしていた壬生六斎念仏講中の人に、芸能六斎の復活と子ども六斎の実施について思案している旨を伝えると、壬生六斎念仏講中の当時の会長はじめ、壬生六斎念仏が協力してくれることに決まった。壬生六斎念仏指導のもと、まずは子ども六斎を立ち上げ上鳥羽六斎念仏の芸能六斎復活の足掛かりを創り上げることになる。おりしも、平成二二(二〇一〇)年に、念仏六斎用の太鼓を新調しており、その太鼓が芸能六斎の基礎の曲である「四つ太鼓」にも転用可能であったことも大きかったという。上鳥羽六斎念仏の人々も芸能六斎の復活に意欲を見せ、平成二三年二月、まずは子ども二人、大人が五人で「四つ太鼓」の練習を開始した。

その年の浄禅寺奉納は念仏六斎に加えて初めて「四つ太鼓」を披露した。六斎念仏をやりたいという子どもが増えたことにより、九月には上鳥羽子供六斎教室を開始、「上鳥羽六斎ジュニア」とネーミングして「第九回子ども六斎教室成果発表会」に参加するに至った。そして、平成二六(二〇一四)年、上鳥羽六斎ジュニアのベテランを中心に上鳥羽六斎念仏の芸能部を立ち上げ、平成二七(二〇一五)年八月の浄禅寺奉納にはじめて一山打ちを行なった。現在は、上鳥羽六斎ジュニアに約三〇名、その中から芸能部として一六名が練習を重ね、浄禅寺の奉納のほか、年間一〇以上の出演依頼を受けて芸能六斎を披露している。主体となっている上鳥羽橋上鉦講中では



ともと橋上地区の講中であつたが、現在は上鳥羽の六斎念仏として活動していることもあり、芸能六斎に関して上鳥羽の芸能六斎とした。また、芸能六斎の子どもたちが念仏六斎の練習を開始したことで、大きな問題となっていた念仏六斎の後継者不足について幾ばくかの解決を見せた。

芸能六斎の復活にあたつて大きな問題となつたのは演目である。芸能六斎の演目はおよそ六〇あるが、全保存会に共通している「発願念仏」「四つ太鼓」「祇園囃子」「獅子」「土蜘蛛」「結願念仏」もそれぞれの保存会によって曲調やリズム、踊りなどは異なり、保存会ごとに特色がある。上鳥羽の芸能六斎を指導する壬生六斎念仏のA氏は、自分たちの曲を大切にしたいという思いが根底にあり、簡単に他保存会の演目をそのまま取り入れて行なうのは違うのではないかと考えた。また、他保存会の演目を取り入れるにしても、指導する立場として一度その演目を覚えなくてはならないこともあり、それならばと上鳥羽独自の新しい曲を創り上げるようになった。自身も六斎念仏を継承する者として、今あるものを受け継いで守っていくのが六斎念仏であるため、新しい曲を作つてそれを受け継いでいってもいいのではないかと考えたそうである。そして、自身もそうであるように上鳥羽オリジナルの曲であるからこそ、子どもたちが自分たちの曲として大切にしていってもらいたいという願いもあつた。

新しい曲を作成すると言っても、六斎念仏から離れることはなく、長唄や義太夫、地歌を取り入れ六斎念仏化したルールにのっとり作曲されている。それは、歌のない部分の表現である。カタやカンカンなどと呼ばれるカン高い音を出す京都の六斎念仏特有の太鼓は三味線を表現することが多く、三味線以外の締太鼓、鼓、笛、唄などの楽器も太鼓、鉦、笛で表現される。現行の芸能六斎曲と聞き比べても違和感のないように、このルールを意識して曲を作ることによってそれは六斎念仏の曲となる。しかしながら、まだ六斎念仏に取り入れられていな

い長唄などの曲を六斎念仏化することはしなかった。それは、演者が子どもであることが前提にあったため、現代の子どもがあまり耳にすることのない長唄などを六斎念仏化しても覚えるのは難しいだろうという判断であった。現行曲との大きな違いは、子どもが馴染みやすいリズムである四分の四拍子になっている点であろう。また、踊りや動きの部分についても、六斎念仏特有の踊りや動きを取り入れたこと、手踊りに舞踊を意識したことで、現行曲との差は感じられない。

このように新しく芸能六斎の曲を創り上げることが可能であったのは、指導するA氏がもとと音楽を嗜んでいたことに加えて、六斎念仏に対して造詣が深く、各保存会の見学や曲の理解を深めるために原曲の長唄を聞くなどしていたことも大きい。

### (三) 上鳥羽六斎念仏の演目

上鳥羽六斎念仏の演目は、新たに創出された「月輪」<sup>つきわ</sup>「わらべ」<sup>あめぎつね</sup>「乙姫」<sup>あめぎつね</sup>「花唄娘」<sup>あめぎつね</sup>「天狐」の五曲に加えて、基礎を大事にしつつも上鳥羽オリジナルの要素を加えた「四つ太鼓」と「獅子」である。一山打ちには欠かすことのできない「発願念仏」は壬生六斎念仏のものを、「結願念仏」には上鳥羽の念仏六斎の一曲を使用することになった。ここではそれぞれを紹介したい。

#### 月輪<sup>つきわ</sup>

カタの上打<sup>かみうち</sup>一名、豆太鼓の側打<sup>かわうち</sup>四名以上、二丁鉦一名、笛一名以上で編成される。笛の静かな音から始まり、活気ある掛け声と太鼓が調和する曲である(写真7)。これは壬生六斎念仏の「鉄輪」をイメージして作られた曲となっており、上打がオモテを打ってリードしていく。太鼓を肩の上に振り上げて打ったり、眼前まで太鼓を持



写真7 月 輪

ち上げて打つと言った六斎念仏特有の動きが取り入れられている。太鼓を振る動作の入った曲は、嵯峨野六斎念仏の「四季」などにも見ることができる。口歌は、夜に狸がさまざまに化ける様子を歌ったものになっており、上鳥羽の念仏六斎の曲の歌詞が入れ込まれ、念仏六斎とかけ離れないようになっている。

〔口歌〕

今宵 誘われ 見上げるは月の輪

枯れ葉を乗せては誰に変わろうか わらべにしようか(イーヤ)

あちらの旦那に こちらの女将に 娘にしようか(イーヤ)

腹鼓 叩いてなあ

ツルシャン テンテン ツルシャン テンテン  
ツルシャン テン シャン テン シャン(ヨイ)

向いの和尚さんが こちらをじっと見て 屏風に  
筆入れ 絵を描いた

隣のおかあさんが それ見て笑った 屏風を覗けば 尾が出てた(ソーレ)

修行がたらぬと 恥かいた(ヨーイ)

飛んで跳ねれば姿は空へ ひとつ回れば大日さん 裏のおじさん 念仏 どちらが上手に唄う

悪逆なんたら なんまいだあぶ 阿字の子なんたら また立ち還る

ツツテ ツツテ ツツテ ツツテ ツツテ ツツテ ツツテ ツル

ツツテ ツツテ ツツテ ツツテ ツツテ ツツテ ツツテ ツル

ツツテ ツツテ ツツテ ツツテ ツツテ ツツテ ツツテ ツル

ツツテ ツツテ ツツテ ツツテ ツル ツツテ シャン

月が帰る 月が帰る 月が帰る 月が帰る シャン シャン シャン

わらべ

カタの上打が二名に豆太鼓の側打が四名以上、二丁鉦一名に笛一名以上で編成される。上打が中央で曲を打ち、側打が周りを囲みながら踊って、合いの手を打つ曲である(写真8)。吉祥院六斎念仏の「大文字」や久世六斎念仏の「源平盛衰記」、中堂寺六斎念仏や嵯峨野六斎念仏の「猿廻し」にあるような、太鼓を肩の上に担ぎ上げて踊る六斎念仏独特の動きが組み込まれている。口歌には、子どもが上鳥羽から壬生へと向かう途中、遊んでしまいう内容になっており、京都の通り名を歌った「丸竹夷」をイメージして作詞された。

〔口歌〕

上鳥羽 上がれば壬生に着く 裏の家から テンツルテンツル 聞こえりや あさげ支度も 放り出して  
ドッコイ





写真8 わらべ

一、二、三、四、五、六、数えて 七、八、九、  
十、あいさにお参りして 笛の音色に 踊りを付  
けて 鉦を鳴らして 太鼓打つ ソーレ  
えらけりや休んで、また上がる ドッコイ  
わらべの遣いといえ ば お師さん呼んできよし  
東寺に七条越えれば 五条 松(原) 高(辻) 仏  
光寺  
ツンテン シャンシャン ツンテン シャンシャ  
ン  
ツーテーツール ツーテーツール ツテツルツテ  
ツル ツテチリシャン  
西入りや東へ 飛んでは回って  
チーチリガ チーチリガ ツツテーチーチリ  
シャン ソーレ  
えらけりや休んで、また上がる ドッコイ  
一、二、三、四、五、六、数えて七、八、九、十、  
あいさにお参りして 笛の音色に 踊りを付けて  
鉦を鳴らして 太鼓打つ ソーレ



写真9 乙 姫

## 乙姫

気付けば日が暮れ トッチリチリチリシャーン

「乙姫」の口歌は説教節「信徳丸」に取材し、登場する乙姫を主体とするもので、痾が治り、願いが叶うという内容になっている。カタの上打二名に笛一名、二丁鉦一名で編成され、高度な技術が必要とする難曲である(写真9)。久世六斎念仏の「やぐら」<sup>(8)</sup>を参考に、笛と鉦を加えて四者の息が揃わないと打つことのできない曲となっている。しかしながら、難曲であるがゆえに、現在は鉦を入れることができず、太鼓二名、笛一名で打ち、三人での練習が必須となっている。

### 「口歌」

風に隠れる心は如何に 揺れる葉に泣き音を流し  
月夜に見る 想いの影  
訪うては舞う 何処や トッテン 縁に見える姿  
は トッテン  
ヨーイ 手を取っては ツテツテ ツッテン  
襖ぎゆく清水へと 聞いてください観音さん 言

葉貰いがたやと

サーラーラーラー サーラーラーラー サーラーラーラー 羽ぼうきで

ひと振り撫でれば上からツツテン ふた振り撫でれば下からツツテン

チリチリガッテン チリチリガッテン チリチリガッテン チリチリガッテン

心込めて もう一度戻りましょう

ひと振り撫でれば上からツツテン ふた振り撫でれば下からツツテン

チリチリガッテン チリチリガッテン チリチリガッテン チリチリガッテン

心込めて 残りふたつ ヒイ アーヨーイーー ヒイ アーヨーイーー ヒイ ヒイ ツテツテツンテン

心込めて 残りひとつ ヒイ アーヨーイーー ヒイ アーヨーイーー ヒイ ヒイ ツテツテツンテン

心込めりゃ願い叶う 善哉なりとシャンシャン

### 花唄娘

壬生六斎念仏や嵯峨野六斎念仏の「願人坊主」や千本六斎念仏の「祇園囃子(雀踊り)」のように、太鼓を打ちつつ、手踊りも入る芸ものである(写真10)。女の子が打つことを前提に女性のしぐさや動き、しなやかさを意識して作られた華やかな曲である。踊り手四人、二丁鉦一人、笛一人以上で編成される。芸能六斎では、四人一組で演じる曲が多いため、「花唄娘」も四人で踊る曲になっている。口歌には、京言葉がふんだんに取り入れられている。

### 〔口歌〕

ソーレ 都トテシヤン 京の町娘 はんなりした浴衣に 髪を結うて簪 手を袖に隠しては愛らしく ソー



写真10 花唄娘

レ  
都トテシヤン 花唄娘は 春に咲いた葵を 空に  
かざし和らぐ ほのかにする香りと琴の音が 心  
ふたつ踊らせて  
いちびる子に がさい子 あかந்தれに 泣きべ  
そ はよねきにおいぬい あんじよう教えましょ  
しまいまで せんぐりしよし おきばりや  
いちびる子に がさい子 あかந்தれに 泣きべ  
そ  
ヨーイ チンチレ ツテシヤン 稽古がしまえば  
ひとつ手踊り うちへいにしな おじゃみ回して  
よそへ飛んでく  
その庭先 かにんどすえ 松の葉拾い指に結  
んだ おうさんどこえ  
ふたつ手踊り その通りで 舞子ねえさんお出  
かけしはる  
歩く姿を真似てみましょか 下駄の鼻緒が切れて  
転んだ おうさんどこえ





写真11 天 狐

みつつ手踊り うちの戸口で 壬生のにいさん  
ようおこしやす

かくれん坊でもいかがでしょう か 円の隙間や覗  
きみつけた おうさんどこえ

よつつ手踊り 一息つけば 稽古しましょう た  
すきを掛けて

お見え(に)なります 皆様方に 失礼のないよう  
にしなければ

そ、そ、そ、そ、そこでもうよし そ、そ、そ、  
そ、そこでもうよし

そしたら また明日 ごめんやす

天狐  
あめぎつね

カタ二名、豆太鼓二名、鉦一名、笛一名以上、狐一  
名で編成される。太鼓が両側に立ち、掛け合いをする  
中で狐が登場し、狂言を行なう(写真11)。狐の神職が  
御幣を持って、雨をやませようと祈りを捧げ、最後に  
雨の代わりに飴を降らす。飴をまく演出は、上鳥羽の  
オリジナリティと特別感を出すために考えられた演出

である。そこには、六斎念仏は人に見せるためのものなので、見て楽しめるものというA氏の思いが込められている。

〔口歌〕

どちらへ どちらへ おはくさんが通る どちらへ どちらへ おはくさんが通る  
にってんさん がってんさん お頼みます おいでくださりませ お姿を崇め  
こちらへお座りくださりませ ほんに かしこみ かしこみ 申します

雨上がれ テンテンテン ありがた ありがた

雨上がれ テンテンテン ありがた テンテンテン

晴れてきた 晴れてきた 替わる物 降らそ

晴れてきた 晴れてきた 替わる物 降らそ

ツテツツテチレ ツテツツテシヤン ツテツツテチレ ツテツツテシヤン ヒー

どちらへ どちらへ おはくさんが通る どちらへ どちらへ おはくさんが通る

四つ太鼓

上鳥羽では「四つ太鼓」の「流し」と呼ばれる基礎の打ち方やリズムを壬生六斎念仏から習い、そこからアレンジして、「ドロ」「壬生打ち」「鳥羽打ち」など上鳥羽独自の打ち方を考案している。また、大正年間まで行っていた芸能六斎において、「六つ太鼓」と呼ばれる演目が行なわれていたとの記録から、これを復活させた(写真12)。六つ太鼓は四つ太鼓に二つの太鼓を追加して打っていくもので、中堂寺六斎念仏などが行なっている。当時の打ち方は不明であったため、演者である子どもたちが二通りの打ち方を考案し、指導のA氏に見てもらった。



写真12 六つ太鼓

て決定し、完成させた。

#### 獅子と土蜘蛛

「獅子」の笛のメロディーは各保存会が使用している曲の共通点を取り、子どもが覚えやすいように短めのフレーズを繰り返したものとなっている。「土蜘蛛」のパートも同様に、他の保存会の笛の旋律に共通するメロディーを取り入れた曲となっている。

また、獅子と土蜘蛛の動きについては、基本の動きを上鳥羽オリジナルで作成し、獅子が土蜘蛛を追い払うという筋は他の芸能六斎と変わらない。

ここで注目したいのは、口歌の存在である。口歌は歌うことでリズムを取り、太鼓を叩くことができるもので、曲を習得するときにも有効とされている。上鳥羽の芸能六斎では、曲の創作にあたって、口歌も作成された。それは、曲を作成したA氏自身の経験から芸能六斎を習得するうえで口歌の重要性が意識されたためである。口歌を覚えることによって太鼓などの道具

がなくても練習が可能となり、リズムを覚えることができる。また、歌を歌うことによってリズムを取ることができるため、曲の途中からでも入ることができ、次世代へ継承するときにも伝えやすいというメリットがある。そのため、上鳥羽でもまずは口歌を覚えることから練習をはじめた。子どもたちは通学時にも口歌を歌いながら登下校していたようで、練習に来ていない子どもも覚えて歌えるようになっていたという。歌詞は子どもが覚えやすいように工夫がなされていて、子ども目線で作詞されている。また、日常ではあまり使われなくなっている京言葉を組み込むことで、京言葉も覚えることができるようにしたため、言葉の意味、歌詞の意味もきちんと子どもたちへ教示したという。

口歌は、曲を覚えリズムを取るためのものであると先述したが、必ずしも芸能六斎を継承するすべての人が口歌を覚えるわけではない。ある保存会の一〇代の若者は、口歌を覚え、幼少のころから演目を見聞きすることで演技を覚えた。しかし口歌の重要性は理解しており、今後も六斎念仏を継承していくことを加味して、口歌を覚えたいと考えているという。どの保存会のどの曲にも必ずと言っていいほど口歌は存在しているが、演目の習得方法はそれぞれの保存会によって異なっている。幼少時から見聞きして覚えることは別として、ある程度の年齢になってから六斎念仏を始めたときには、やはり口歌は重要となってくるのではないだろうか。

## おわりに

一八世紀後半からさまざまな流行芸能を取り入れ、生み出された芸能六斎は、京都以外では見ることもない特異な六斎念仏として発達してきた。鉦や太鼓を打ち鳴らしながら念仏を唱えるという六斎念仏の基本を変えるこ



となく、さまざまな芸能の曲や演目が太鼓を主とした芸能六齋用の演目へと作り変えられ、六齋念仏化してきた。念仏主体から芸能化したことによって、楽器は太鼓と鉦のほかに笛も加わるが、太鼓が主であったため、長唄や常磐津、地歌、義太夫、歌舞伎などに用いられる三味線、鼓、締太鼓、笛、唄などの楽器の表現を太鼓に置き換えることが六齋念仏化とも言える。そして、手踊りや狂言風の演出が加わる芸ものと呼ばれる演目も誕生していく。

近年上鳥羽六齋念仏では、芸能六齋の復活がなされ、新たな芸能六齋の曲が創出された。芸能六齋の曲が三味線などの楽器を太鼓で表現していることを踏まえて、芸能六齋の現行の曲と聞き比べても違和感のないように、このルールを意識した曲作りが行なわれ、口歌も作成された。口歌の重要性は高く、曲の習得や練習、曲を伝承するときには有効なものである。上鳥羽では子どもが主体となっているため、子どもが京言葉を学び、上鳥羽六齋念仏の念仏六齋に親しめるよう口歌にも工夫がなされた。

新たな演目が生み出されたと言っても、現行曲のルールに則って作られたため、曲の評判は高く、演者の子どもたちの力量もあって違和感なく新しい六齋念仏の曲として受け入れられている。また、現行曲には原曲となる曲があるのに対し、上鳥羽の曲目はゼロから作り出されていることが大きく異なるところであろう。そして日本の伝統音楽から取り入れた芸能六齋の曲目は、手拍子を打ちにくいリズムがあるため、現代の人びとが馴染みやすい四分の四拍子で作曲されている点も異なっている。近世に新しい芸能や流行の芸能を取り入れ続け、発展、進化してきた芸能六齋は人に見せ、人びとが見て楽しめるものであり、新しい芸能六齋曲が生み出されてもそれは変えることはない。

上鳥羽の芸能六齋の今後の課題としては、「祇園囃子」を復活させることであるという。芸能六齋には必ず入

る「祇園囃子」のみ、まだ一山打ちに加えることができていない。上鳥羽橋上の「祇園囃子」は祇園祭放下鉦の祇園囃子と同じであったと伝わっている。曲は放下鉦の囃子方から習うことが可能としても、「祇園囃子」を演じるのに必要な鉦もなく、また二人・四人が太鼓を上下に振りながら踊る曲のため、子どもでは太鼓を持って踊ることが難しい。囃子の途中で壬生六斎念仏のように棒振りを入れるのか、もしくは嵯峨野六斎念仏や久世六斎念仏のように道化を登場させるのか、それとも他の保存会には登場しないものを入れるかなど、課題は残る。いまは子どもが中心となって担っている上鳥羽の芸能六斎は子どもたちが成長した一〇年後どうなるのか、また後継者不足が叫ばれる他の保存会の動向も含めて、これから京都の芸能六斎について注視していく。また、若狭の六斎念仏のなかには芸能六斎とは言えないが、芸能的要素を含む六斎念仏がいくつか伝承されている。今後は、京都と若狭の比較なども含めて研究を進めていきたい。

# キーワード…六斎念仏、民俗芸能、芸能化

## 〈注〉

(1) 六斎念仏の歴史、宗教性については、柿本雅美「六斎念仏の宗教性―現代における六斎念仏の諸相―」を参考にされた。

(2) 芸能六斎…梅津六斎保存会、桂六斎念仏保存会(休会)、吉祥院六斎保存会、久世六斎保存会、小山郷六斎保存会、西院六斎念仏保存会、嵯峨野六斎念仏保存会、千本六斎会、京都中堂寺六斎会、壬生六斎念仏講中

念仏六斎…円覚寺六斎念仏保存会、上鳥羽橋上鉦講中、西方寺六斎念佛保存会、六波羅蜜寺空也踊躍念仏保存会

(3) 京都市一九七九『史料京都の歴史』第三卷、平凡社、五八三頁より引用。

- (4) 壬生狂言は、京都特有の民俗芸能であり、春の京都を代表する行事のひとつである。壬生寺にて伝承されており、芸能は能・狂言に近いものではあるが、面を付けた演者が鉦、笛、太鼓の囃子に合わせて仏教の因果応報の教えを身振り手振りで表現する無言劇である。春の大念仏会に参集した人々へ信仰の有難さを如実に見せようとする試みが工夫され、一六世紀前半に大念仏狂言が成立していく。一七世紀後半になると能や狂言の曲目が取り入れられ、大念仏狂言化していき、また祇園会の棒振を転用するなど多くの関連芸能を取り込んで特異な民俗芸能を確立させていった。
- (5) 中堂寺六斎念仏にもあったというが、現在は廃曲となっている〔芸能史研究会編一九八二、九〇〕。
- (6) 〈歌詞〉へ月が鳴いたか山時鳥、冥途の鳥と聞くにつけ、便り聞きたや父母の、南無阿弥陀仏波阿弥陀
- (7) 「こども六斎教室成果発表会」は、平成一五年度からはじまり、平成二八年度現在一四回を数える。小学校や各保存会が主宰することも六斎教室の成果発表の場となり、今年は九つの保存会が参加した。
- (8) カタ二名だけで行なう曲で、互いの息が合わなければ打つことができない曲。

〈参考文献〉

浅香淳編一九八四『邦楽百科辞典雅楽から民謡まで』音楽之友社

植木行宣二〇〇九『舞台芸能の伝流』岩田書院

柿本雅美二〇一五「六斎念仏の宗教性―現代における六斎念仏の諸相―」『佛教大学宗教文化ミュージアム研究紀要』第一号

河竹繁俊編一九六四『総合日本戯曲事典』平凡社

京都市一九七九『史料京都の歴史』第三卷、平凡社

芸能史研究会編一九八二『京都の六斎念仏調査報告書』

小林責・西哲生・羽田昶二〇一二『能楽大事典』筑摩書房

下中邦彦一九八三『歌舞伎事典』平凡社

田中伝右衛門一九七九「歌舞伎囃子要録」東洋音楽会編『歌舞伎音楽』音楽之友社

富澤慶秀・藤田洋監修二〇一二『最新歌舞伎大事典』柏書房

平野健次・上参郷祐康・蒲生郷昭監修一九八九『日本音楽大事典』平凡社

平野建次・景山正隆一九七九「上方下座音楽」東洋音楽会編『歌舞伎音楽』音楽之友社

佛教大学宗教文化ミュージアム編二〇一二『佛教大学宗教文化ミュージアム資料集 佛教大学開学一〇〇周年企画 念仏六齋と念仏のころろⅡ』

佛教大学宗教文化ミュージアム編二〇一二『佛教大学宗教文化ミュージアム資料集 佛教大学開学一〇〇周年企画 嵯峨野六齋念仏 一山打ち披露』

佛教大学宗教文化ミュージアム編二〇一四a『第二四・二五回シアター公演 唱う念仏、踊る念仏―京・若狭の六齋念仏』

佛教大学宗教文化ミュージアム編二〇一四b『第二六回シアター公演 嵯峨大念仏狂言』

山路興造二〇〇二a「六齋念仏の歴史」八木透編『京都の夏祭りと民俗信仰』昭和堂

山路興造二〇〇二b「京都の六齋念仏―芸態を中心に」八木透編『京都の夏祭りと民俗信仰』昭和堂

山路興造二〇〇九『京都芸能と民俗の文化史』思文閣出版

壬生六齋念仏講中 <http://miburokusai.cloud-line.com/>(二〇一六年一〇月二一日閲覧)

重要無形民俗文化財「京都の六齋念仏」千本六齋会のサイト <http://rokusai.jp/>(二〇一六年一〇月二一日閲覧)

京都中堂寺六齋会 <http://kyoto6931.com/>(二〇一六年一〇月二一日閲覧)

上鳥羽の六齋念仏 <http://audaisukitukaayasuu.wixsite.com/kamitoba-rokusai-jp>(二〇一六年一〇月二一日閲覧)

〔謝辞〕 資料を提供いただきました上鳥羽橋上鉦講中、またお話を聞かしてくださいましたみなさまに心よりお礼申し上げます。